

童

2018年2月2日。

白夜。それは言葉に出来ないほど、表現に困るほど幻想的で美しい夜。キリッと凍り付くほど引き締まる空気。まん丸の月ときらめく星。恐ろしいほどの静寂。一面真っ白な世界。白くそして柔らかいふわふわの雪面。そこに影を伴ってモノクロの小さな子ども達の姿。雪面に2本のレールが敷かれていく。人生60年にして、初めて体験した白夜。2時間も、この至福な時を大地で過ごす事が出来たお泊まり保育の夜。

マッキンリーに登った長男の話に。「登る時は、夜中に登るんだ。昼間は、雪が緩み、雪崩の恐れ、クレパスの開く危険、しかし、夜は、雪が締めりその心配もなく、アイゼンも刺さり、視認性も良い、そして、何と言っても、雪明かりで美しい」クロカンで夜の静寂(しじま)を歩いている時、まさに自分がそんな場所にいるように思えました。

毎年恒例の夕涼み会の蛍見物に出かけるコースを思い出して下さい。あのコースを滑り降り、あの続く田んぼの中(一面広いグランド・平原になっている)を自由自在に好きな所へ時間を気にせず歩き回る子ども達。誰もが一人。青ちゃんも一人で白夜を楽しみました。

こんな貴重な自然のドラマ、移ろいを、チャンスとしてもものに出来たこのひととときに、本当に満足した一夜でした。

自然の中の暮らし、移ろい、そのチャンス、星野道夫が、一瞬のドラマのために何ヶ月も泊まり込んでシャッターを押す瞬間。それは、忍耐と運と最後は、その人の感性の持つ直感だと思います。それは、自然の中で養われ研ぎ澄まされていくように感じます。

そんな感性を子ども達と共に磨かせてくれるこの人生に感謝です。



【生きるあなけん】

4年前の5月のゴールデンウィークに、新築のののな文庫に、若い姉妹とその両親がちょっと大地を見学させて下さいと訪れました。この時は来客が次々にやってきていたので「どうぞ、勝手にあちこち見て下さい」とほとんどうっちゃっていました。姉妹のその笑顔と澄んだ声が印象的でした。

その年スタートしたアカデミー。その勉強会がほぼ毎週末に、泊まりで夜行われていました。その夜に、いつも手作りのお菓子を持って訪れるようになったのが、その姉妹の姉。そして、勉強したり山へ登ったり自転車で遊んだり、大地でも皆で寝泊まりしながら、我が家の子ども達とも仲良くなっていきました。最初会った瞬間から「こんな子が長男のお嫁さんになってくれたらいいなあ」と夫婦でそれぞれ思っていました。長男との付き合いよりも、私たち家族とのそれが長い期間でした。長男は、その時の自分の夢や生き方に夢中で、彼女はただの友人であり、私たちは「全く見る眼がないね、あの子を逃したら雄飛の感性はそれだけのものだ」と啞然として見ていました。そして、インドに続き、京都で ヴィパッサナー瞑想行って来た後、「付き合うことのする」と言って、大地発祥の部屋で2人で暮らし始めました。

2年前の子ども祭りの当日の朝、ネパールからの電話で、彼女が大げがをしたとの連絡。それを2人で乗り越え、大地が医療福祉施設としてインキハイエース福祉車両で成田空港の厳しい検問を突破して飛行機の真下まで横付けした事は奇跡でした。入院生活は、雄飛が病院横の河原でキャンプして、毎日ご飯を作り病院に運んだ事により、更に2人の絆は深まったようです。退院した日はリンゴ取りの場で手伝いをしていました。

翌年、元旦には「感謝の会」という結婚式と披露宴を祖母、両親、兄弟だけを招待して、全て手作りでもてなしてくれた2人は、4月に理想の暮らしを求めて野沢温泉に新居を構えました。

ご存じのように、太陽光自然エネルギーで電力をまかない、湧き水と薪の暮らし、ほぼ自家生産物での玄米菜食の暮らし。そんな彼らの暮らしから学ぶこと多数。お金や電気 ガスなどのエネルギーを大量消費して、自然な暮らし・オーガニックな暮らしをしていますと気取ってきた自分達、高度成長期の残像から離れられない自分達、物欲がある自分達。どうやら、彼らを見てみると、確実にその世界が広がっているし、多くの若者達もそんな暮らしになびいていっている流れを確信し、安心し、彼らを応援することは、自分達のあり方を変えていくことだと思ふようになりました。

そして、「子どもが授かった」という連絡。うれしさと同時に「一体、どんな出産 育児をあの環境でしていくのだろう」という不安な予感。「医者、医療は?? 出産は? 検診は」予想通り「出産は、病気ではなく自然の流れだから医者は必要ない」最もな主張。助産師さんを探していたので安心していましたが、なかなか相性の合う人が見つからず、いつの間にかその話は立ち消えに。10月 11月 12月になっても、何の詳細連絡もなく、彼女の両親も何も知らされていないとお互いにやきもき。どうやら、結局2人だけで頑張るらしいと予想。その陰で、いろいろ勉強し、信頼出来る人に相談しているらしい。彼女は、普通一般の初産を迎える妊婦とは思えないほど、畑でよく働き、よく動いていた。そして、いつも2人であるがままにと言う意味で、お腹の子に向かって「あるちゃんあるちゃん」と声がけして、出会う人に「お腹を触って欲しい」と頼んでいた。

予定日は29日頃。妻は一ヶ月前位から、出産の手伝いで泊まり込みになるからとバッグにいつでも出動出来るようにと準備万端。年末年始にスキーキャンプはお手伝いは難しいと、男手で乗り切ると計画。そんな中でも、具体的な相談はなしのつづて。

青ちゃんの誕生日前の20日に誕生のお祝いに来てくれた席。「どうやら27日に生まれるらしい」と。お腹のあるちゃんに「いつ生まれてくるの? 23日 24日 25日・・・」と問いかけたところ、23日は拒否!! 27日にぐるりと動いたとのこと。青ちゃんは、笑ってまさかねと内心思っていました。彼らのインド占星術の友人は、新年4日過ぎだと答えたと言う。2人の生年月日や出生時間などから占ったと言うので、こちらの方が信頼性が高いか!?

23日は軽くスルーされ、25日~キャンプ突入。出産のことは忘れるほど子ども達とはしゃぎ、27日の朝、ちょっと陣痛がきたらしいと連絡。その後何の連絡もないまま、妻はお昼頃から不安になりながら、2人で生活クラブの食品をとり倉庫へ出かけたのが3時。ここに電話があり、朝9時頃に生まれ、今、後産を終えてようやく連絡出来たとのこと。様々なエピソードの一つ、感激のあまり「ところで男か女か確かめたのは出産から1時間以上過ぎてから」

事前に何でも知りすぎてしまうことによる安心感は、夢とファンタジーと想像心とドキドキと自然の直感を奪い取るという話は、別に機会として、彼らしい奮闘があったのか。4人の子どもの出産を見てきた青ちゃんも、あの出産に一人で対応することはさすがに出来なかったし、医療に頼る自分がいるし、その精神力もない。

積雪1mを超える極寒の古民家 あのエネルギーに頼らない暮らしの中での出産育児。膨大なおむつの洗濯 食事作り 産湯につけない まだ沐浴は2,3回 頭は洗わない 裸 ふんどし おまるでのうんち 訪れる毎に、私たちの行って来た育児の常識にはないエピソードや現場を見て驚くと同時に、全て納得して学ぶようになってきた。そういえば、数年前にソロモン諸島出身の臨時大地スタッフの女性の出産子育てもそうだった。

彼らの子「孫 あるちゃん」も、自然育児や本の通りに、すくすく大きくなっている。枕元には、たくさんの本があり、気合いの入った大人が見守っている。彼らの事を、最近「筋金入りの『生きるあなけん』」と呼んでいる。